ARADO～異世界の監視者～

曾良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＲＡＤＯ～異世界の監視者～

【Ｎコード】
Ｎ１１１７Ｚ

【作者名】
曾良

【あらすじ】
中学３年生の藍城龍は何もない普通の学生。ただ普通に学校に行って、勉強して、友達と帰る、そんな生活を送っていた。
ある日、森で迷ってしまい、崖から転落してしまう。しかし、目が覚めるとそこは見知らぬ村だった。
一方、龍の行方を追って結城海斗は龍の捜索に乗り出した。そんな海斗の前に謎の男が現れる。そして、男は海斗にこう告げる。
「君は神隠しの本当の理由を知っているかね」
龍と海斗、二人の運命が狂い始めたとき、物語は始まり、そして、

すべてが終るを告げる。

プロローグ（前書き）

初めてのオリジナルですので、なにとぞお手柔らかに・・・。

駄文ですがよろしくおねがします。

プロローグ

5月、桜がちらほら散り始め、学校に通う通学路一面に花びらが広がっている。

「お～い、早く行かないと遅刻するぞー」

「いや、時間的に見ても大丈夫だろ。というか、もうちょっとゆっくり行こうぜ。こっちは朝から坂を全力疾走するなんて御免だからな」

たわいもない会話が通学路に響き渡る。男は面倒臭そうに坂を上っていく、その上にはそわそわとしている男とそれを呆れたような顔で見ている男一人、中学の制服を着いる。その制服はまだ皺が少なくどうやら新品のようだが、他の2人はさほど綺麗な服ではなくかなり使い込まれているようだった。

のろのろと坂を上っていく。１５ｍほどしかない坂だがそれを上るのにかかった時間は5分もかかった。

「海斗、なんでこの坂に何分かかってんだよ・・」

「だってな、眠いんだもん」

「眠いって・・・・にしても遅いんじゃ」

「あーあ、わかったよ。素直に謝るよごめんな、陵」

海斗の呼ばれて男の子はぺこりと一礼するのと同時に欠伸もする。

「お前らしくないな、陵」

「なんで俺が説教なんか・・・・・それより、学校に急ぐか、行こうぜ龍、海斗」

そう言うと、陵は再び歩き出す、それに続き海斗と龍が後に続く。だが、海斗は依然のろのろとしたペースで二人の後をついていく。

「それでは出席をとります」

朝のＳＨＲ（ショートホームルーム）で先生が教壇に立ち、出席名簿を確認しながら点呼を取る。１番の奴から返事をしていく。

「井上舞さん」

「はい」

井上舞（いのうえまい）、このクラスのマドンナ的存在、だがちょっと天然なとこがある。普段はよく海斗や龍とつるんでいる。

「佐崎陵君」

「ほい」

佐崎陵（さざきりょう）、このクラスのムードメーカでお調子者だが何かあるごとに説教するという癖があり、クラスからはムードメーカーであると同時に兄貴的存在で親しまれている。

「藤堂乾」

「はい」

藤堂乾（とうどうすすむ）、真面目で勤勉家、このクラスの委員長。足が速いことが取り柄、自称「世界一」らしい。

「結城海斗君」

「は～い」

結城海斗（ゆうきかいと）、どことなく抜けているおり、何をやるときも面倒臭いというがやるときはちゃんとやる。運動が苦手で動くことは好きではない。だが、クラスからは慕われている。

それぞれの点呼を取り終えた先生は出席簿を閉じ、まわりを見わたす。一通り見終え、喋り始める。

「皆も知ってるとおり、最近日本中で頻繁に起きている失踪事件の

件だがここの近くでも起きたらしいから十分注意するように」
先生の言葉を遮るようにチャイムが学校に鳴り響く。先生は「さて、終了」とだけ伝え教室を出ていく。
チャイムが終わるのと同時に海斗の席にはいつものごとく、舞、陵、乾が集まる。
「失踪事件か・・怖いよな」
乾がさっきの先生が言ったことについて話し始めた。
「ああ、あれだろ・・・日本全国で人が何人も疾走してるってやつだろ？」
「海斗・・・疾走じゃなくて失踪だからね。文字間違ってるよ・・・」
海斗のアホな回答に舞がつっこむ。海斗がこんななのはいつものことなので皆は無視している。
「すまんすまん、で、あれだろ通称『神隠し事件』ってやつだろ。最近テレビでよくやってるよな」
神隠し事件、今、全国で多発している失踪事件のことである。失踪しているのは子供から大人まで幅広くの人が失踪してしまっている。昔から起こっていたようだが最近では1ヶ月に5人は消えている、あまりの失踪者の多さに全国の警察は困惑しているとテレビでながれていたのを海斗は知っており、そのことをここで話しているのだが、その事件事態が有名になりすぎて説明する必要性が無いのだが・

・。

「ここまで多いと、もしかして今度は俺たちが被害にあうかもな」

微笑混じりに言う海斗、それにつられて皆も笑ってしまう。４人は笑い続ける、まるでもう笑えることがないように・・・。

チャイムの音とともに先生が教室の中に入ってくる、それをいると３人はすぐさま席に着き、いつものように授業を受け始めた。

時刻は6時半、空は赤く染まり、道には帰路につく学生が目立ち始めていた。龍は朝来た道とは違う道を帰っていた。理由は龍たちの後ろにいる――――――――――

「いや～、すまんねお前らまで付き合せちゃって」

「いいよ、どうせまたお前ら3バカだけだと心配だしな」

3バカ・・・結城海斗、佐崎陵、神崎宏太の3人のことを皆はこのように呼んでいる。なんで、3バカなのかというか、理由はこの3人が馬鹿だということだ。

「おい、バカってハッキリ言い過ぎだぞ。てか誰だよ?」

とにかく、馬鹿だから3バカということなのだ。

「言いたい放題いいてるな、誰か知らんけど」

「ああ、宏太にも聞こえてたのか」

「お～い、なにやってんだ。早くいくぞ」

龍に急がされ急いでその場を去る3人。

今回、何故龍たちが何をしに行ってるのかというと神社の掃除のボランティアなのだ。最初は海斗ら3バカが始めたのだが、この3人は集まると何をしでかすかわからないということでいつも龍たちが一緒にや
っているのだ。

「わざわざ舞たちまで来ることなかったんじゃ・・」

「何言ってるだよ～、海斗だけじゃ心配できてやったんじゃないですか」

「いや、俺や陵もいるけど・・・」

「宏太・・・」

龍は宏太の肩に手を置く。そして、何かを悟ったのか宏太は「わかった」とだけ言い海斗と舞を階段の前に残しそのまま上がっていく。

「にしても、仲がいいねあの２人」

「そうだな・・・」

「どうした龍？」

「いや何でもないよ修成」

修成はやけに元気がない龍を見て何を思ったのか、今だ先ほどの階段のしたで言い争いを続ける海斗たちのもとに走り去っていった。

「なんだ、あいつ・・・って陵は？」

話に夢中で気づくのが遅れたが陵がいない・・。どこにいるのかと探して龍は神社の奥に入っていった。

「あれ、龍は？」

海斗ともに戻ってきた修成は先ほどまでいた龍の姿が何処にもないことに気づく。

「どうせ、トイレかなんかだろうよ」

海斗はそういうといつもように掃除を始めた。

「あれ・・・ここどこだ？」

陵を探して森に入ってきた龍は迷っていた。ただ単純に迷った。しかし、あたりは暗くなり初め早く森から出ないと危ない状況になっていた。

「やばいなこの状況・・・・・おやじに怒られる・・」

龍の家庭は農家で両親二人とも農業をしている。龍の家はあまり門限にはうるさくはないが、今の龍の格好は確実に怒られる格好なのだ。

「こんなに制服が汚れるとか・・・・」

先ほど転んだのがいけなかったのか上も下も全身どろだらけ、どう考えても怒られることは避けられないだろう。

どんどん、暗くなりもうどこが何処なのかわからない。

「たくっ・・・・草が茂りすぎなんだよ――――――うわっ！」

枝をかき分けて進んだ先は――――――――崖。この山は大きな崖が多く、危険なスポットでもあった。その一部に龍は落ちてしまった。

崖を転げ落ちる龍は途中で岩に頭を強打してしまった。

（やばい・・・意識が・・）

意識を失う龍が最後に見たのは地上で怪しく輝いてる光だった。

「うぅ・・・ここは？」

龍は目を覚ますと見たこともない場所寝ていた。床も天井も周り一面木造でできており、見た感じ古いという感じがあっている内装だった。

「ようやく、気づいたか」

声のした方を見ると、若い男性が一人立っていた。その男性はなぜか昔の人が来ているような鎧を着ており、その顔もなまましい傷が体のあちこちについている。

「お前大丈夫か？大分意識が無かったが・・・・それにしても、お前が俺の家の前でボロボロでいたときはびっくりしたぞ。家に上げたついでに服も着替えさせておいた」

龍が自分の服装を見ると、さっきまで着ていた制服ではなく、動きやすそうな生地が薄い着物みたいなものだった。

「あの・・あなたは？」

「俺か？俺は佐久間秀光だ」

（名前が昔の人みたいだな・・・・・・てか、俺、崖落ちたよな・・・）

「あの、すいません。ここってどこですか？」

「うん？何を言っている。ここは俺の家だろう」

「ちょっと、すいません」

龍は立ち上がり入口らしき場所に向かい外に出てみるとそこは――

――――――――

「・・・・どこ・・・・ここ・・」

龍がいた町とは全く違う村だった。

「タイムスリップ？」

だが、タイムスリップではない。

プロローグ（後書き）

とりあえず、この作品はちょくちょく頑張っていこうと思います。

読んでくださった方はありがとうございました。

感想やアドバイスなど随時受付中ですのでよろしくおねがします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1117z/

ARADO～異世界の監視者～

2011年12月4日02時48分発行